

## 和紙の調査分析に秀でた人物

東京都市大学名誉教授（文学博士）河野徳吉

はじめに

「向日庵」会員の皆様、本日は寿岳文章氏の功績を讃える会に参加でき光栄です。演題は「和紙の調査分析に秀でた人物」ですが、テーマは、豊富な知識、理念、国史大辞典共同編纂、圖前制度、以上の四点に絞り解説し、関係資料は会場側面の机上に展示しています。

### 1. 豊富な知識

昭和9年、寿岳文章氏は書物展望社から『書物の道』を刊行しましたが、その書物を読んだ和歌山県の南方熊楠<sup>みなみかたぐま</sup>は、寿岳氏に手紙を書き対談しています。南方氏は慶応3年生れ、昭和16年に没しますが、若くして英国へ留学し、生態学、植物、人類、民俗、博物学を研究し『ネイチャー』誌に50回も投稿しました。この二人は尊敬し合い、7年間、対話しました。寿岳氏はこの交流を昭和20年8月に執筆した『日本の紙』に記しています。

「和紙のすきな南方氏の乞ふにまかせておほやけにしたが、いくさのわざはひのために紙型を焼いてしまったので、このたび版をあらたにすることとなつた。（中略）決して気まぐれや気どりによるのではなく、和紙のことを書きしるすこのやうな本には、（中略）今も昔もかへりはない。」[南方は四年前死亡している]

この書物は、タテ21センチ、ヨコ15センチ、72頁、「鉄道省国際観光局観光人文庫」出刊となっている。現物を展示し閲覧に供したい。（なお、本書は寿岳文章が著した『日本の紙』[靖文社、昭和19年]の改定再版本と考えられる。）

不思議なことですが、この書物は連合軍側に渡ったのか、京都河原町大丸の隣に設立したアメリカ図書館に数冊展示されていたのを記憶している。なおまた、昭和32年東京の製紙博物館の名誉顧問に就任した京都の新村出、禿氏祐祥、寿岳文章、上村六郎各氏から和紙文献を寄贈されたが、その中には『日本の紙』が収納されていました。

次に寿岳文章氏の講話と指導は、製紙博物館内で三つに分けた和紙研究グループに対してあったが、その概要は以下のごとくです。「和紙の知識と調査活動」、この講話は『紙漉村旅日記』の研究調査と経験を基本にしたものであります。

1) 紙漉き場の家族構成、対話、作業場の方向位置、道具類の場所、紙の乾燥方法（板干、鉄

板)、紙の仕上げとその道具、紙の分別と保存、紙の枚数、計量基準、寸法、梱包、荷札、保存場所、分別、発送、数量、紙蔵、種類ごとの帳簿と伝票、商談記録、売り掛け表。

2) 紙原料の生産、楮、三桮、麻、雁皮類の栽培は自家製（所有地）栽培、周辺の農家からの買取り、流通市場に注文、専門商社から定期的を買取る、原料商社の資本にたよる紙の原料の買付季節と金額、代価支払方法、資産運用、青田買い、仲買人から借受する。

原材料の運搬資金、相場、手形、税金、藩の融資、中馬伝馬の手形支払方法、流通資本から借受紙庄屋を中心にした講組織、頼母子講による入札。

3) 紙の原料を押さえれば紙漉農家は破産できる世の中、成長力の弱い紙漉場は自然淘汰するといわれている。一方、開発力と市場からの要求に対応できる紙漉場は急速に市場を席卷でき生き残る仕組ができていられる。おそらく時代の流れに添う能力、信用、独創力、想起による、人間の意思が強い者が未来の開発に役に立っている。

和紙の研究開発者の諸例を探ってみると、世の中の活動を見聞きし、時代ごとの要求に対応する想起が予想外の結果を生みだしている。

これまでの話題から逸脱しますが、紙の取扱い方法を瞬間的に判断する手法を寿岳先生に教わりました。それは科学的ではなく、自分の経験を脳に覚えさせ学習すれば、原料の種が一度覚えたらその繊維の構造がわかる。次に紙漉場で原料の繊維処理する方法を観察、また紙の漉き方と干し（乾し）方が、物覚えの極意に到達、数多く経験すれば、自然に指先が動き感性として受け入れる、と具体的に指導してくださいました。

ある意味では、指先以外まじっていないが紙漉工房の人、紙商の人達は一度覚えた紙は一生忘れない、それは目で紙を見る感覚の働きと指紋で繊維の品質を記憶にとどめたからです。寿岳先生は、前掲で述べた三つの講話を取りまとめ、紙に携わる人々に、推測とは何か、これまで知らないことを見て知る過程を大切に刺激をあたえ、和紙の極意にめざめようと述べています。

## 2. 和紙の歴史と考え方

寿岳氏は『正倉院の紙』の学術調査では、名を書き連ねた中の代表者であった。このことがきっかけになり、日本歴史学会編集による『日本の紙』を吉川弘文館から昭和42年に出版している。同時代に『国史大辞典』の編纂にも携わっていたためか、体調を崩されていた。

この『日本の紙』の執筆には、永年、蓄積してきた古典籍をはじめ、正倉院文書で培った和紙、経典類、色彩あふれた色紙、装幀紙をはじめ、これまで知られていない仏教国家の構築に役立った紙類を存分に活用されています。

その理念が頭から去ることがなかったのか時代ごと主要文献を年代順に整備（現在、向日庵に整理）加えて紙の博物館所蔵目録を丹念に調査研究、必要な記録は（ノートに記録）数年間書齋に籠り筆を進めていったと「はしがき」に書きしるしている。「目次」には上代、中世、近世に分けているが、上代、中世については、未発表の原本、国立公文書館をはじめ国の文化財に至るまで調査、また関義城氏所蔵の資料を引用している。これらの貴重な文献は一千数百冊におよぶ。

これまで知られていない和紙を外から見えるよう短くまとめると以下のようになります。

世界に誇れる日本特有な和紙とその構造・原点。律令社会に必要とした和紙は、どこから由来したのか、国府・国分寺を中心に紙漉場を設けたのか、その系路、運搬は人力（他）陸路、河川、海路、流通経路、日程、役人の人脈、以上は国が調達する年間の紙、中務省図書寮、諸国から税で納める貢納紙とその税の種類、紙の植物原料、紙に仕上げるその数量を集荷地初期の段階では、紙になる原料とその種類がことなる、仕上げた紙は揃わない、また紙の寸法枚数がそろわない、この他、紙の厚い薄いの標準化がないので混乱があった。その結果、国府郡司から紙の統一化を太政官府に報告、十世紀藤原時平は、延喜格の撰上、その後延長5年藤原忠平は延喜式を撰上し、紙の政策を軌道にのせていった。

12世紀以降、院政の成立と武家階級の興隆、僧兵の勢力増大、対外貿易、荘園整理令による政治、経済、社会の激変による変革があって、物流動向を正確に分けたその結果、紙の種類・生産が浮上しはじめた。

諸国に荘園を所領している公家、寺社領、豪族の所有地は、新興勢力である地方の武家が新しい紙を自立生産、これまでとまったく異なった武家特有の紙が領内で抄造されるに至った。

14世紀になると東南アジアの諸国から、通商貿易、地域貿易、民間商社を中心とした交易がはじまり、御家人所領で紙座、商座、二十二座が設け紙売買制度ができあがっていった。このことが連座したのか、私船が増え大陸との交通があり、紙の売買が盛んになっていた。越前国では紙訴訟願があつてか、その始末が域内の紙問屋と船名主に皺寄せがあり、紙漉郷では非常にむごたらしい商況になっていた。

15世紀になると幕府の財源の転換は、商業資本の発生と地方分権の進行により、勘合貿易船が急速に進んでいった。その背景として、対外的な勘合符をつくり信用状により、安心して交易ができ盛んにした。同時に財源の流れがよく、地方武家の手形、通行税、口銭、段銭など様々な財源制度が、有効に流通しはじめていった。

足利義満は、明国の勘合符を得た応永11年（1444）大名領の形成が安定したとき、城下町に紙を専門に漉く地域を設け、紙市、紙庄に新しい薄様紙、雁皮紙、鳥子紙、色紙、檀紙、奉書紙をつくらせて、国内外に新しい紙を流通し商業資本を充実、城内には能楽、茶の湯、連歌初学、能狂言の完成を設け、紙の需要を盛んにしていった。また美術分野においては、山水画の完成、襖障子に絵図、屏風絵または装飾図、儀式用の扇等、優雅な紙に好みの画図をつくる習慣が流行している。

### 3. 国史大辞典の編纂

国史大辞典の編纂事業は、昭和50年代から日本の歴史学に研鑽を積む多数参加、各項目の要点をとりまとめ、文章の中に絵図、写真、数表を挿入、むだがないようまとめ、十五巻別巻三にまとめ数年間で完成した。

日本の紙については大日本古文書を編纂した竹内理三氏、寿岳文章氏が先達となり十数人の専門家が協力した。

紙の項目は、歴史資料に多く所見するので権威筋の学術専門家の指導を受けるとともに、科学分野から分析する人々に共同で研究し、精度の高い記録を本文に挿入している。

寿岳文章氏は『正倉院の紙』の調査研究で成果をあげていた。加えて各地の和紙生産から紙の種類、原料処理、分析評価など、有識者を集め協力してもらい、最後まで他のものと間違いないよう次のように編集業務を担当していた。

「和紙に関する項目と掲載内容」参考文献に掲載

- 一、学術研究論文、書物に掲載、専門機関誌等に発表を参考にした記述、資料図録
- 二、有識者の前で発表、記録に残した印刷物
- 三、著作権に登録されている印刷物、図録、写真、映像物
- 四、大辞典に掲げる文章、目次、字幕、図録、写真、絵、等は紙に関する編集者と相談する。
- 五、言語、方言、古文書の書き方、基礎言語の統一と整理
- 六、出版者の編集担当者と相談、打合せ、時代考証

国史大辞典の作業は、国内に窮まったわけではなく、海外諸国の歴史事情とかかわり共有するため、和紙については様々な性質の違う言葉があった。

和紙の編集に精力を尽した寿岳氏は健康を害していたが、病に打ち向かって、心にわきいでる情念を最後まで向日庵でなしとげていった。

### 4. 鬮前制度

大阪紙商仲間の鬮前制度は、正徳5年(1715)結成されている。その場所は土佐堀川を中心に天神橋から筑前橋(図参照)である。小嶋屋七兵衛の覚書をはじめ、「諸蔵産紙御尋答書」「西様御尋一件」「諸蔵産紙鬮前一件記」等三つの古記録が残っている。その記述をあらためると、西国各藩の蔵紙が淀川筋に紙蔵を設けて、市場の景気がよいとき、大阪紙商仲間に開放する。この市を支配する者は毎年春に紙仲間が中ノ島にある紙屋で籤を引き、一年間各藩が市場に放出した蔵紙の金額を決め紙商仲間に公平に分配する役目を担う。

紙を取扱う鬮前の支配役は、年番制であるが地域ごと役員を決め、組頭をつくり、組の中で紙の種類・品質を決めて、市場に分売している。

紙仲間の記録には次のようなものが残っている。

「間より買受候而ハ二重口錢ニ相成 迷惑之趣をもつて願上候  
蔵紙并商人紙も買合仕居 平均値段も相分り  
蔵紙之見競を以売買仕候 重立品荒増奉申候 眼前仲間難立行及難渋候」

上の三件の苦情を鬮前仲間の代表に意見を申している。公平無私である点でも問題をかかえている。したがって組頭、地域の紙屋、伝統的な紙商の中に逸脱、不正をする行為があつて、申告する人が段々増えていった。

上の申告書は、山代御紙会所に通報、二度目の検査（荷崩れ、水濡、破損、汚れ）のとき修正している。

鬮前紙仲間の資本形成は、取引の大小、伝統、組構成と組頭になった回数、仲間の信用度、公平な入札、藩の信用維持に貢献、資金調達、紙を運ぶ河川と荷上げ、改修、（水路、掘割の浚渫、倉庫の増設）ときには、天明飢饉の際に「御尋答書」救済活動によって鬮前紙仲間を救った記録がある。

「近年諸紙拂府之儀 国々の風聞承合候処 西国筋に度々洪水に有之楮水損仕  
其上先年諸国不熟に而 米価高値に付而ハ 国々紙漉場所紙草の世話等行届兼  
紙漉人も相滅じ漉立て支障云々」

この事情を知った鬮前仲間は組頭惣代が事情を調べ、山代紙会所に奉願、即刻西国各藩と一体に救済活動を実行したと述べている。

これまで紙の研究文献にはなかった記録について、寿岳文章氏は、鬮前制度、各藩の紙揆、紙会所の不正などの古文書を細かく書き未公開の資料が遺されている。できるならば、このほど整理した山仲進氏の諸国蔵紙蔵鬮前、鬮数帳等、鬮前文書を調べ、向日庵の人々により発表、公開が望まれる。